

不確定性動機を認める・認めないTAT物語の特徴に関する研究(2) 手術場面のリード文によって創作された物語の分析

A Study on the Characteristics of TAT Stories with and without Uncertainty Motives (2):

Analysis of Stories Created by Lead Sentences of Surgical Scenes

山口県立大学 看護栄養学部看護学科

甲原定房

KOUHARA Sadafusa

Keywords: uncertainty orientation, uncertainty motive, TAT, text mining,

Abstract

TAT stories created by students to determine an individual's uncertainty orientation were analyzed using text mining techniques. The stories that included an uncertainty motive were those in which the difficulty of the task was caused by the characters' lack of experience. This study created examples of stories both with and without uncertainty motives.

【要約】

個人の不確定志向性を判定するために創作されたTAT物語について、テキストマイニングの手法を用いて分析した。不確定性動機を認めることの出来る物語は、登場人物の経験不足からくる課題の困難さを内容としていた。本研究では不確定性動機を含む・含まない物語例を作成した。

【目的】

本研究は甲原(2022, 2023)に引き続き、個人の不確定志向性を判定するためにTATによって制作された物語において、不確定性動機を認めるあるいは認めないものにはどのような特徴があるのか検討することを目的とする。

不確定志向性理論は個人の認知と動機づけを結ぶモデルである。個人がどのような環境、場面で認知的な課題に取り組むのか、言い換えれば、どんなときに考えるのかといった認知スタイルに関する理論である。

Sorrentinoら(Sorrentino & Short,1986, Sorrentino & Roney, 2000)は、この不確定志向性理論を提唱し、幅広い分野にその適用範囲を示している(Sorrentino & Roney, 2000を参照されたい)。例えば、日常的に経験する感情や学業への適応感が個人の不確定志向性と文化が持つ不確定性とのマッチ、ミスマッチによって規定されるとする研究(Sorrentino, Nezelek, Yasunaga, Kouhara, Otubo & Shuper, 2008, Szeto, Sorrentino, Yasunaga, Kouhara & Lin, 2011)および個人の不確定志向

性がさまざまな社会的行動を予測するとする研究(Sorrentino, Otsubo, Yasunaga, Nezelek, Kouhara & Shuper,2005)等がある。

この不確定志向性理論では個人を不確定志向性の高いUO(uncertainty oriented person)と、不確定志向性の低い(確定志向性の高い)CO(certainty oriented person)に分類する。前者のUOは不確定な場面で、この不確定性に接近した上で、明快さを獲得することに動機づけられる個人であるとされる。一方で後者のCOは不確定性に接近することなく、今ある枠組みを維持し、明快さを維持しようと動機づけられる個人であるとされる。

例えば、健康診断で意外な数値に「異常値」が示された場合を例にあげると、不確定志向性の高いUOは、なぜそのような数値が出たのか原因を調べる、あるいは精密検査を受けて自分の本当の健康状態について知ろうとするだろう。他方でCOは、その異常な数値を無視する、妥当性の低い情報源、例えば周囲の同僚に「これくらい大丈夫だよな?」と同意を求める、「自覚症状がないから大丈夫」と自ら納得させるというように、今ある健康な自分の枠

組みを維持することによって、不確定性に対処すると予想される。

日本における不確定志向性理論に関する研究には以下の研究があり、保健行動、社会的影響、話し合い活動に及ぼす効果について研究が進んできた(甲原・安永, 1996, 2002, 2004, 2010, 甲原, 2011, 安永・甲原, 1998)。また、最近では小松・力丸・大田・渡部・茂木・吉田・甲原・平上・安永(2023)によって、協同的な学習や「話し合い活動」において不確定志向性の違いによって授業中の感情経験に差異があることを示す研究がある。

しかしながら、小松ら(2023)の研究が現れるまでの長期間、本邦において不確定志向性による研究の拡がりは見られていなかった。その原因として、個人の不確定志向性を判定するための方法(Sorrentino, Hanna, & Roney, 1992)には、調査対象者がTAT「主題統覚検査」の手法によって創作した物語を、研究者が一定の基準によって判定し、個人の不確定性動機の有無を判定するというプロセスが含まれているためであると考えられる。この判定には習熟が必要であり、不確定志向性判定のハードルとなっている。

不確定志向性理論をより広範に適用するためには、このTATによる物語創作と不確定性動機判定の部分をより簡便化する必要がある。このTATによる物語を利用する部分について安永・甲原・大坪(1997)は創作された物語を主題などによって分類し、典型的な物語の分析を試みている。しかし、当時はこれらの物語について所謂「目検」による分類となっており、TATを利用した不確定性動機判定の部分を改善することにはつながっていない。

そこで、甲原(2022, 2023)はテキストマイニングの手法を導入し、どのような語がどのような使われ方をしているのかといった視点からの物語分析を試みている。本研究は上記の甲原(2022, 2023)に引き続き、創作された物語についてテキストマイニングを行うことで、不確定性動機を含む、あるいは含まない物語にどのような特徴があるのかについて検討する。

【方法】

「対象者と物語」

2007年に採集されたTATによる物語文を用いる。分析対象とした物語を創作したのは大学生82名であった。

「手続き」

TATによる物語の創作

1つの練習問題と5つのリード文が冊子によって調査対象の大学生に提示された。従来の手続きでは通常、1つの練習問題と4つのリード文を提示すること

が多い。しかし、本研究のデータ収集の際には、それまで使用されたことのある5種類のリード文すべてを使用して物語の創作を依頼した。したがって、実験協力者は1つの練習問題に続き、5つの物語を創作したことになる。練習問題と5種類のリード文は以下のとおりである。

(練習問題) ある人が喫茶店にいます。

(リード文1) ふたりの人が、実験室で装置を用いて作業しています。

(リード文2) ひとりの人が座って「どうなるのだろうか」と思いにふけています。

(リード文3) ひとりの若い人が立っています。この人の後ろには、何かの手術が行われている情景が見えます。

(リード文4) ひとりの人が交差点(現在は分かれ道と訳している)を思い浮かべながら、考えています。

(リード文5) ひとりの人が机に向かっています。机の上には1台のコンピュータと何冊かの本があります。

以上のリード文に後続して、

- (1) 「誰がいますか。何が起こっていますか」
- (2) 「どうしてこうなったのでしょうか。この前に何が起こったのでしょうか。」
- (3) 「いま、何を考え、感じていますか。何を望んでいますか。」
- (4) 「そして、次はどうなりますか」

という4つの質問文に答えながら、物語を作成する。これら4つの質問は約1分間隔で実験者が読み上げて進行した。

この物語の作成に引き続き、本研究では分析しないものの、明快さ維持動機を計測するために「権威主義尺度」(Cherry & Byrne, 1977)の測定を行った。

なお、これらの手続きを開始する前に採集したデータを使用し論文等で発表すること、この手続きからいつでも抜けて良いこと、抜けたからと言って一切の不利益がないことについて説明を行った上で物語の作成を実施した。

不確定性動機の判定

大学生によって創作された物語については判定経験の豊かな2名の判定者によって判定作業を行った。不確定性動機は「動機あり」「疑わしい」「動機なし」の3つの主カテゴリーに分類され、判定が異なった場合は合議の上で決定を行った。

本研究では、甲原(2022, 2023)に引き続き、これまで分析を行っていない「リード文3:ひとりの若い人が立っています。この人の後ろには、何かの手術が行われている情景が見えます。」による物語

について分析を行う。

創作された物語の内、不確定性動機なしと判定された物語は71例、動機ありと判定された物語は7例であった。合計で78例の物語が本研究の分析対象となった。

なお、通常の不確定性動機判定のための得点化手続きにおいては、「不確定性動機あり」と判定された物語について、引き続き下位得点の有無判定を行うことで不確定性動機の強さを得点化する。ただし、本研究では不確定性動機の有無と物語文の特徴の関係について明らかにすることを目的としているため、下位得点の有無については検討しない。

物語文の分析

創作された物語をSPSS text mining for survey version 4.0.1によって形態素（以下、単語）に分解し、単語を出現頻度ごとに順位づけした。後述するコレスポネンス分析などで分析を容易にするために物語文をテキストマイニングする際に単語の数を制限した。出現頻度の上位約20～30語となるように、動機あり物語ではしきい値2で単語を抽出した結果がTable 1である。同様に動機なしの物語ではしきい値9で単語を抽出した結果がTable 2である。Table 1及びTable 2で示される数値は、何回使用されたかの延べ数ではなく、単語を使用した対象者の人数である。例えば「手術」という語が同一個人の記事で2回以上使用されたとしても1回とカウントされる。したがって、Table 1およびTable 2が示しているのは、不確定性動機ありと判断された物語では7名が、不確定性動機なしと判定された物語の中で58名が、「手術」という単語を使用していることを表している。

しきい値以上出現した単語については、不確定性動機のある・ない物語それぞれに特徴的な関係があるか否か検討するためにコレスポネンス分析を行い、付置図を作成した（Figure 1, Figure 2）。これは、どのような語が同時に使用されるかを検討する際に有用であると予想される。

加えて、本研究では決定木分析の手法を用い、どのような単語が不確定性動機の有無を弁別する際に有用であるのか、つまりそれぞれの物語に特徴的な単語があるのか否かについても検討する。

【結果】

「動機あり物語に固有の単語」

Table 1に示される単語の内、動機なし物語での頻出語であるTable 2には出現しない、あるいはしきい値以下しか出現しない単語を以下に示す。括弧内の数値は、動機なし物語での出現度数（人数）である。「初めて」（4回）、「言う」（5回）、「起

こる」（0回）、「出る」（7回）、「少し」（2回）、「状態」（2回）、「手」（2回：ただし、手術という場合は頻繁に出現する）、「家族」（4回）、「新米」（0回）、「救急車」（2回）、「緊張」（3回）。なお、上記「起こる」は、物語例のとおり、自動詞の「起こる」、他動詞の「起こす」として出現するが、以降、同じものとして扱う。

動機なし物語の数は動機あり物語の約8倍存在するため、動機の有無による出現確率に違いがないのであれば、上記の単語は、動機なし物語において動機あり物語の約8倍程度出現することになるが、この数値よりもいずれも低い数値となっていることがわかる。つまり、上記の単語は動機あり物語に特徴的な固有語である可能性がある。

Table 1 動機あり物語で頻出する単語

単語	度数（人数）
手術	7
医者	5
初めて	3
若い人	3
言う	2
なる	2
行う	2
運ぶ	2
起こる	2
出る	2
成功する	2
成功	2
助かる	2
少し	2
しかし	2
無事	2
患者	2
状態	2
女性	2
手	2
家族	2
子供	2
新米	2
救急車	2
緊張	2
母	2
若い	2
ない	2

「動機なし物語に固有の単語」

同様に動機なし物語では出現する一方で、動機あり物語では出現しないあるいはほとんど出現しない単語は以下に示すとおりである。括弧内は動機あり物語での出現度数（人数）である。「来る」（0回）、「いる」（1回）、「病院」（1回）、「思う」（1回）、「自分」（1回）、「いい」（1回）、「ある」（1回）、「早く」（0回）、「看護師」（1回）、「遭う」（0回）、「終わる」（0回）、「望む」（1回）、「立つ」（0回）の語である。

先述の通り、動機なし物語は動機あり物語の約8倍存在しているため、Table 2にあげられた単語の約8分の1回程度の出現は動機あり物語において期待できる。そうであれば、動機なし物語の固有語である可能性があるのは、動機あり物語での出現が全くない「来る」「早く」「看護師」「終わる」「望む」「立つ」の単語となる。

Table 2 動機なし物語で頻出する単語

単語	度数（人数）
手術	58
無事	24
若い人	20
行う	19
なる	17
くる	16
いる	15
病院	14
思う	14
成功	13
ない	13
自分	13
若い	13
いい	12
ある	12
医者	12
早く	11
運ぶ	10
看護師	10
遭う	10
終わる	9
望む	9
立つ	9

「コレスポネンス分析」

動機あり物語

動機あり物語に出現する単語をしきい値2で抽出し、コレスポネンス分析を行った布置図がFigure 1である。極端な偏りは見られないものの、「若い」「無事」「起こる」「緊張」が近くに集まっており、「新米」「状態」「初めて」「若い人」「患者」「成功する」「医者」「助かる」「手術」といった語が比較的近傍に布置されていることが分かる。

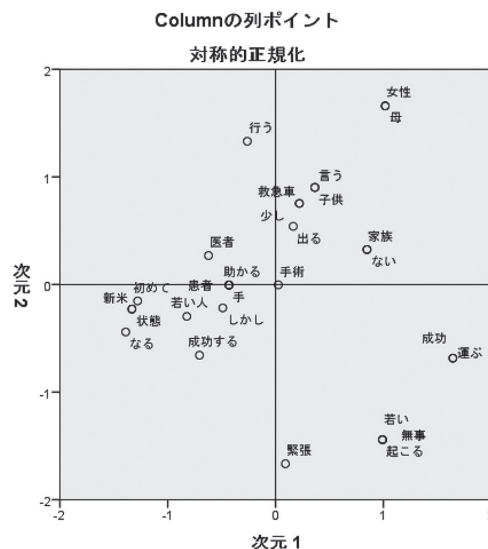


Figure 1 不確定性動機あり物語で使用される単語のコレスポネンス付置図

動機なし物語

動機なし物語に出現する単語をしきい値9で抽出し、コレスポネンス分析を行った布置図がFigure 2である。「自分」のみ離れた位置にあることが特徴的であり、その他の単語はほぼ近傍に布置することが分かる。

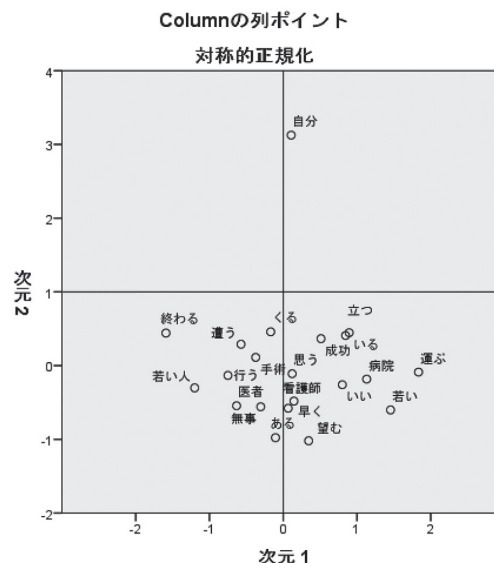


Figure 2 不確定性動機なし物語で使用される単語のコレスポネンス付置図

「決定木分析」

不確定性動機の有無を目的変数とした決定木分析(Chaid法)を行った。決定木分析に先立ち、すべての物語に対してしきい値2であらためてテキストマイニングを行い、このデータを決定木分析の処理に用いた。結果はFigure 3に示す。
 ※ノード上の数字1はその単語が出現することを、0は単語が出現しないことを示す。

Figure 3からは2例と少数ではあるものの、「新米」を含む物語ではすべて不確定性動機を認めることがわかる。不確定性動機を含む残りの5例の

内、「起こす」(起こる)を含む物語では不確定性動機を認める割合が多くなる。 「新米」「起こす」を含まない物語には3例の不確定性動機を認める物語があり、ここで「女性」を含むと、不確定性動機を認めることが多いことが示される。これらの単語の使用法から不確定性動機を認めるルールを表すと以下のとおりである。

- ①「新米」を含む物語
- ②「新米」を含まず、「起こす」を含む物語
- ③「新米」および「起こす」を含まず、「女性」を含んでいる物語

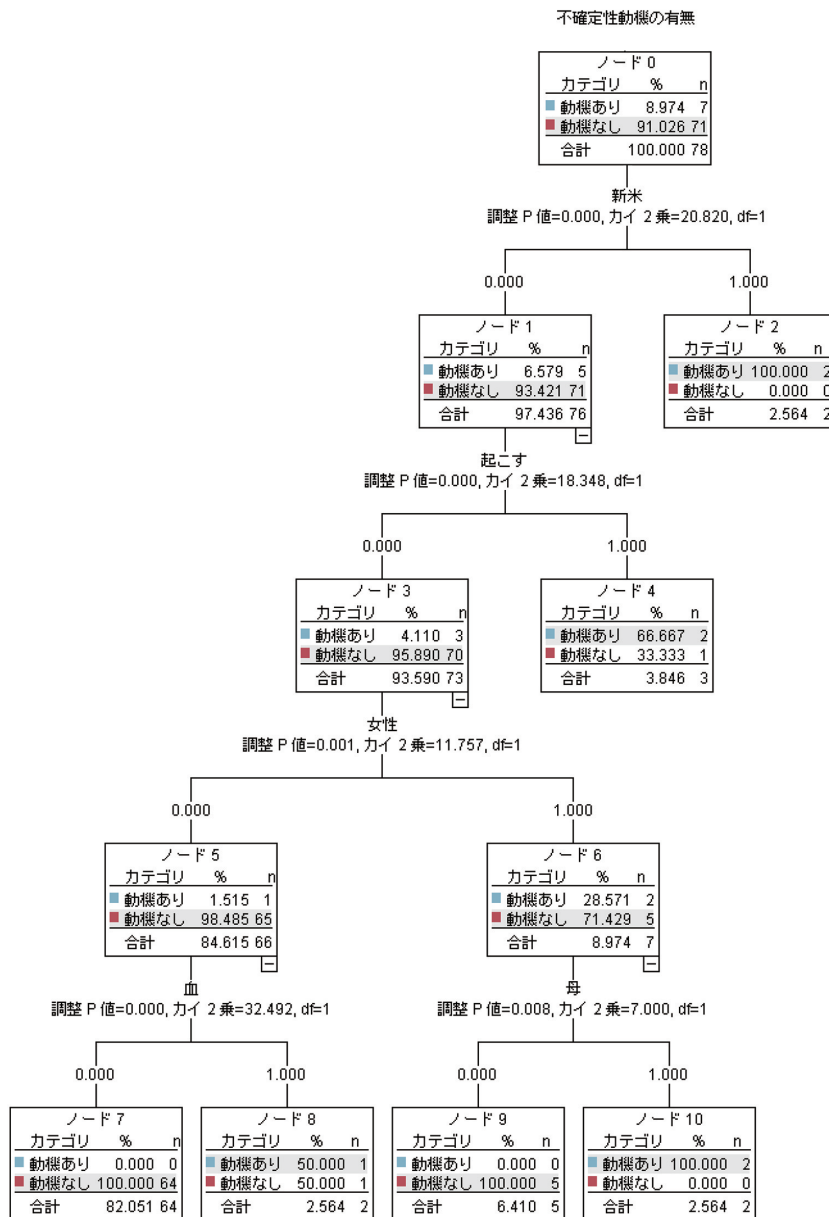


Figure 3 不確定動機の有無についての決定木分析

視点を変えて、不確定性動機を認めない物語となるルールを表すと

- ③「新米」「起こる」「女性」「血」という語を含まない物語となる。

【固有語を含む物語の内容と特徴】

動機あり物語の固有語を含む物語の特徴

先述の「初めて」「言う」「起こる」「出る」「少し」「状態」「手」「家族」「新米」「緊張」の中で、動機なし物語に登場することが少なかった「起こる」「新米」から検討する。

『起こる』

「起こる」を含む動機ありの物語は2例あり、爆発や交通事故が「起こる」、事故を「起こす」物語である。実際にはこの2例の他にも「交通事故が起き」という使用例があるため、3例の物語があると考えることが出来る。事故によってけがをした対象者を医療者が救おうとする物語である。つまり「起こる」という単語は何らかの望ましくない事故の発生を意味している。

『新米』

「新米」の医者が手術に臨む物語である。ベテランの医師ではないため手術の成功が疑わしい状況にある物語である。課題の達成が困難であり、その原因が、課題そのものの困難さ、難易度の高さではなく、登場人物の経験のなさであるという物語内容である。

他の動機あり物語に医者の経験不足を表現した物語があるか否か検討したところ、「若い医者」「若手の有能な医者」という表現はあるものの、この人物の経験不足を示唆する物語内容ではなかった。

したがって、「新米」と表現される若い登場人物の経験不足からくる困難さがある課題に、この「新米」と表現される登場人物が取り組むという内容に不確定性動機を認めることが出来る。

『少し』

「少し」を含む物語は2例あり、特に共通した使用法があるわけではなかった。

『状態』

「状態」は2例あり「手術が必要な状態」「危険な状態」というように、このリード文3による物語では、登場人物が直面する「困難な状態」を記述する際に用いられている。

『救急車』

「救急車」は動機なし物語50数話ある内でも2例しか使われておらず、動機あり物語7例中2例の使用は相対的に多いものと考えられよう。内容は緊急な手術の必要性が記述された物語である。リード文3が手術場面であることを考えると、同じ手術であっても落ち着いた手術ではなく、慌ただしさを含む手

術であることを指し示す場合に「救急車」が使われていることがわかる。

『緊張』

「緊張」を含む物語を参照すると、若く経験の浅い医者が命の危険を含む手術に臨み、なんとかして成功するという物語である。この「緊張」を含む手術は「実現が難しい課題」を表現しており、不確定性への接近と強い関連性のある単語であると言えよう。ただし、コレスポネンス分析図では他の単語から少し離れた位置にある。つまり、他の単語との共起関係が薄い可能性がある。

『手』

「手」は動機あり物語において2例使用されている。一例では「手の施しようがない」との使用例であり、もう一例は「新米さんは初めて手（の助手を・・・）」との記述である。後半の例は「手術」の誤記と思われるため、検討から除外しても良いだろう。

動機なし物語の固有語を含む物語の特徴

先述の通り「早く」「看護師」「終わる」「立つ」は、動機なし物語では頻出する一方で、動機あり物語ではまったく出現しない。このような単語が用いられている物語とは具体的にどのようなものであろうか。なお、Table 2にある「来る」は解釈が困難であるため分析から削除する。

『早く』

「早く」が使用される物語は、見るに堪えないので「早く」手術室から出たい、手術が終わって欲しいという手術からの回避と考えられる物語か、「早く」元気になるって欲しいという望ましい結果への願望の物語かの2種類であった。前者の場合、手術は不快なものであり、回避したいものであるため、積極的に手術に接近、関与する物語にはならないため、不確定性動機を認めることは出来ない。後者の「早く」元気になるって欲しいという物語も特に登場人物がけがや病気に対して積極的に接近、関与するというよりも、単純な願望を示す物語が多く不確定性動機を認めることは出来ない。

『看護師』

「看護師」が手術に立ち会っているという物語である。10例中9例まで手術は成功している。重篤な事故で運び込まれたとしても、事故の被害者、患者はほぼ一命を取り留めている。この「看護師」は中心的な役割を取っているというよりも医師の手伝いをする登場人物であり、詳しい行動も記述されない。

『終わる』

「終わる」は基本的に手術が終わるという意味で使用されている。ここでも興味深いのは、9個の使

用例の中で、その手術はほぼ成功裏に終わっている。結果が不明なものは2例であり、失敗する物語は皆無である。

『立つ』

「立っている」、「立ちつくしている」「立って」いるという形で出現する、これらの物語では、9例中手術の成功が5例、不明が4例である。ここでも前述の「終わる」と同様に明確に失敗している物語はない。

この「立つ」という単語を含む物語では、登場人物は「立っている」ことになり、手術中の自分（幽体離脱している）や他者を見ているという内容の物語である。したがって、積極的に手術の結果に関与する物語にはならず、不確定性に接近する物語とは判断されない。

『自分』

動機なし物語のコレスポンデンス分析（Figure 2）において、他の単語から離れて付置する「自分」が用いられた物語は13例あった。この中で「自分」という語は物語の作者ではなく、主人公を指す語であった。物語の内容は主に手術を受けている当事者とは別の「自分」が手術の成功を祈っているものがほとんどである。中でも手術の成否に「自分」の力が及ばないというものが2例あり、不確実な結果への関与が出来ない物語であった。興味深い内容としては手術を受けている「自分」を幽体離脱した「自分」が見ているという物語が3例あった。しかしながら、「自分」を含む物語に内容的な特徴があるとまでは言えない。

「物語の結末について」

動機あり・なし物語において手術などが成功したのか否かを分類しTable 3に示す。不確実性動機の有無にかかわらず、このリード文3による物語では、成功する物語が相対的に多いことが分かる。これはリード文3による物語の特徴であると言えるだろう。

Table 3	成功・失敗の物語の度数	
	動機あり	動機なし
成功	5	53
失敗	0	7
不明・その他	2	11

【考察】

「不確実性動機あり・なしの典型的な物語内容とは」

本研究の目的は不確実性動機の存否を簡便に判断するための方法開発に向けて、TATによって作成された物語における不確実性動機を含む・含まない物語の特徴を検討することである。

ここでまず、今回検討した「リード文3」で不確実性動機を含む物語自体が少ない理由について検討したい。何らかの手術が行われている場面では、執刀している医師が生殺与奪の権を持つイメージが強いためか、周辺の登場人物、例えば、看護師や家族は経過を見守るという物語になってしまい、この医師が主人公にならない場合、実現について不確実な結果や将来に接近するという物語にはなりにくいものと思われる。

次に使用されている単語から物語について検討を行う。結果からも明らかのように、ある単語が存在する、あるいは、ある単語と別の単語が併存・共起すれば、不確実性動機を含む・含まない物語であると判別することが出来るような固有語は明確ではない。確かに決定木分析に見られるように「新米」という単語が存在する物語は2例とも、不確実性動機を認める物語となっていたものの、この2例をもって登場人物の経験不足を示す単語があれば、確実に不確実性動機があると結論を急ぐことには慎重であるべきであろう。ただし、リード文3の場面での不確実性に接近する物語の1つのパターンとして、経験不足の登場人物が課題を遂行する物語は考慮しても良いだろう。

今回検討した物語には、動機あり・なし物語の一方には数多く使用されているにも関わらず、もう一方にはほぼ登場しない単語が複数存在した。そこで、このような単語を用いて不確実性動機の簡便な判別法開発に向けて、例えば調査対象者に典型的な物語を複数提示し、どれが自分のイメージに近いと評定するといった方法が考えられる。そこで、以下に典型的な物語を構成することを試みたい。

すでに述べたように高額な手術費用をまかなうための資金集めといった方法で結果に関与する物語、あるいは事故を目の当たりにし、周囲と協力して救命対応する物語、手術を任せられた「新米」の医師の奮闘といった物語で不確実性動機が認められた。

一方で動機なし物語の特徴は単語のみならず、先行きがどうなるのか分からない場面、例えば難しい手術の厳しい局面に遭遇した登場人物（自分）がいるものの、結果をコントロールできず、望ましい結果を祈ることしかできないという形が典型であろう。

このような典型的な内容に沿いつつ本研究で参照した単語を用いて以下に物語の例を構成した。

「動機あり物語 1」

「新米」「起こる」「（危険な）状態」「救急車」「緊張」を含み、結果的には肯定的な結果で結尾する物語

「新米の医師が救急車で運ばれてきた患者を前に

緊張した面持ちで立っている。患者の状態は芳しくなく危険な状態である。新米の医者は医師として勤務を最近始めたばかり、自分が今なすべきこと、責任の重大さに不安と緊張を感じているが、自分がこの患者を救わねばならないと思っている。若い医師はさまざまな問題を乗り越えつつ、患者は次第に快方へと向かう。」

「動機あり物語 2」

「新米」を含まず、「起こる」を含む。主人公は医師ではない物語

「友人が大きな事故に遭ったという連絡を受け、病院に駆けつけた仲間たちがいる。友人は体調が急変してしまい交通事故を起こしたのだ。なんとか一命を取り留めて欲しいと願う仲間たち。幸い手術は成功したが、長いリハビリが必要である。仲間たちは治療費を捻出するために力を合わせ、リハビリに取り組む友人を励まし続ける」

「動機あり物語 3」

「新米」「起こる」を含まない物語

「若い看護学生がいる。外科手術に立ち会っている。救急で搬送されてきた患者の緊急の手術に立ち会っている。しかし、血を見るのが嫌いで気分が悪くて仕方がない。なぜこんなにも血を見るのが嫌なのか。慣れればなんとかなるのだろうか。こんなことではいけない。そう覚悟を決めた看護学生は懸命に手術に立ち会い続ける。」

「動機なし物語 1」

「看護師」「早く」「終わる」で終わる肯定的な結末の物語

「看護師と実習中の学生が病状の思わしくない患者について、さまざまな指標を記録している。周囲には患者の家族が心配そうな表情を浮かべて立っている。交通事故で運び込まれてから数日、生死の境をさまよっている。実習学生はこんな実習は早く終わって欲しいと実は思っている。大きな手術の後、患者は奇跡的に回復していく。」

「動機なし物語 2」

幽体離脱した「自分」「立つ」を含む肯定的な物語

「交通事故で運び込まれた若者がいる。若者は自分自身が手術を受けている場面をそばから立って見ている。どうも、幽体離脱をしているようだ。一体自分はどうなってしまうのだろうと心配している。このままではいけないと思い、自分の体に戻り、そのまま意識が回復する。しかし、幽体離脱したときの記憶はなくなっている。」

以上が本研究で抽出し参照した単語を用いて構成した物語例である。今後、このような物語例を他のリード文を含めて構成し、これを調査対象者に示し、これらの物語例への選好について回答を求めるといった方法を試行することが必要であろう。すでに甲原（2022, 2023）で、不確定性動機を含む・含まない物語に出現しやすい単語・出現しにくい単語について一定の傾向が見いだされているので、物語例を示し、不確定性動機を判定する手法を現実的に試す段階に来ていると言えよう。

しかし、一つのリード文に対して、不確定動機がある（1点）のか・否（0点）かという形で実施すると、例えば4つのリード文を用いた場合、点数が0～4点の分布になる。この程度の分布でその後、個人の得点をz得点化し、個人の不確定志向性判断をすることが出来るのか懸念がある。そこで、いくつかの物語例から、自分のイメージに一番適合する物語例を選ぶという形ではなく、それぞれの物語例に自分のイメージとのフィット感を評定させ、より細かい点数化を行うといった手法も可能かもしれない。まだこれらの方法はアイデアの段階に過ぎない。今後、実験的に試行を重ね、さらなる検討を行う必要がある。

【引用文献】

Cherry, F., & Byrne, D. (1977). Authoritarianism. In T. Blass (Ed.), *Personality variables in social behavior* (pp.109-133). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

小松誠和・力丸由紀子・大田啓介・渡部功一・茂木まりあ・吉田彩夏・甲原定房・平上久美子・安永 悟 (2023) 科目「協同学習」を受講した学生の肯定的感情と不確定志向性との関連性について 日本医学教育学会第55回大会予稿集, 228.

甲原定房 (2011) 話し合いによる判断に不確定志向性の異同が及ぼす効果 協同と教育 第7号 12-21.

甲原定房 (2022) 不確定性動機認める認めないTAT物語の特徴はあるか 山口県立大学学術情報第15号 基盤教育紀要第2号 59-68.

甲原定房 (2023) 不確定性動機を認める・認めないTAT物語の特徴に関する研究 県立大学学術情報第16号 基盤教育紀要第3号 107-116.

甲原定房・安永 悟 (1996) 不確定性への志向性と被告人の社会的カテゴリーが量刑判断に及ぼす効果 日本心理学会第60回大会発表論文集, 85.

甲原定房・安永 悟 (2002) 不確定志向性と社会的影響 久留米大学大学院心理学研究科紀要第1号 91-100.

甲原定房・安永 悟 (2004) 防護動機づけと不確定志向性が保健行動に及ぼす効果 日本グループ・ダイナミックス学会 第61回大会発表論文集, 250-251.

甲原定房・安永 悟 (2010) 不確定志向性と少数者の行動スタイルが直接・間接影響に及ぼす効果 山口県立大学共通教育機構紀要創刊号 29-42.

Sorrentino, R.M., Hanna, S.E., & Roney, C.J.R. (1992). A manual for scoring need for uncertainty. In C.P. Smith (Ed.) *Motivation and personality: Handbook & thematic content analysis*. New York: Cambridge University Press, Pp.428-439.

Sorrentino, R.M., Nezlek, J.B., Yasunaga, S., Kouhara, S., Otsubo, Y. and Shuper, P. (2008) Uncertainty orientation and affective experience. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **39**, 129-146.

Sorrentino, R.M., Otsubo, Y., Yasunaga, S., Nezlek, J., Kouhara, S. and Shuper, P. (2005) Uncertainty orientation and social behavior: individual difference within and across cultures. In Sorrentino, R.M., Cohen, D., Olson, J.M. and Zanna, M.P. (Eds.) *Culture and Social Behavior: The Ontario Symposium* **10**, 181-206. Lawrence Erlbaum Associates Publishers, Mahwah, New Jersey.

Sorrentino, R.M., & Roney C.J.R (2000) *The uncertain mind: Individual differences in facing the unknown*. Psychology press, Taylor & Francis, Philadelphia, PA.

Sorrentino, R.M., & Short, J.C. (1986) Uncertainty, motivation, and cognition. In R.M. Sorrentino & E.T.Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundation of social*

behavior (Vol.1; pp.379-403). Guilford Press. New York.

Szeto, C.H., Sorrentino, R.M., Yasunaga, S., Kouhara, S. and Lin, L. (2011) Motivation and performance: Uncertainty regulation in Canada and Japan. *Motivation and Emotion*. **35**, 338-350.

安永 悟・甲原定房 (1994) 不確定性への志向性—その測定法と妥当性の検討— 久留米大学文学部紀要人間科学編 第5・6号35-45.

安永 悟・甲原定房・大坪靖直 (1997) 不確定志向動機の判定規準とその典型事例 久留米大学文学部紀要 人間科学編第11号89-105.

安永 悟・甲原定房 (2002) 不確定志向性と社会的影響 久留米大学大学院心理学研究科紀要第1号 91-100.

安永 悟・甲原定房 (1998) 不確定性への志向性は量刑判断の合議に影響するか 日本心理学会第62回大会発表論文集, 110.

【付録】

「不確定動機を含む物語の例」

「起こる」

(例1) 20代後半くらいの男の人。手術を手伝っている。ある若い男の人が飲酒運転をして、交通事故を起こし、運ばれて来たので手術している。手術にとっても緊張していて、頭の中が真っ白であるが、なんとか無事に成功してほしいと望んでいる。一度ミスをしそうになってしまったが、無事手術は成功。男の人は一命を取り留めた。

(例2) 看護師さんが一名と患者と医者らしき若い人がいる。助からないと言われた幼き少年の命を救おうとしている。、爆発が起こり、手の施しようもない少年を後回しされてしまったので若い医者が助けるために手術をしている。、若い医者は助かって元気になって欲しい。看護師、どうして大切な命を他の医者に見捨てるんだ。患者(幼い少年)、生きたい。手術は無事に成功する。しかし、幼き少年の家族は爆発の事故によりすでに亡くなっており、若い医者とは看護婦の子供として元気に育つ。

「新米」

(例3) 若い人は新米医者で、初めて手術に参加している。患者は癌で、今摘出手術が行われている。患者は夜遅く、救急病棟に救急車で運び込まれた。早急に手術が必要な状態だった。新米さんは初めて手の助手をしたものの、あまりにもグロくて驚いている。今「少しの間後ろを向いて落ち着こうとしてきたい！(原文のまま)」、意を決して手術を手伝う、医者としての考え・あり方を固める。いい機会だったと思う！患者は助かる。

(例4) 若い人は初めて手術をする新米の先生お医者さん。すごい緊張しながらも手術をしている。若い人の実力を認められ、手術を任せられた。うまくいかどうか不安…。でも上手くいって欲しい。一時的に危険な状態になるが素早く対応し成功する。

「状態」

(例3参照) (例4参照)

「救急車」

(例5) 自分が、救急車で運ばれてきた交通事故の人の手術。目の前で交通事故が起き、近くに居合わせた自分と友達と、知らない人だが、皆で協力して応急処置をし、救急車を呼んだ。助かって欲しい。自分を思(原文のまま)の母同じくらいの年頃だったので、他人事ではなく、涙が出てきた。全員で祈っている。家族(女性の)が病院にやって来た。手術は成功し、後遺症は少しあるものの命に別条はなかった。

「緊張」

(例1参照) (例4参照)

「不確定性動機を含まない物語例」

「早く」

(例6) 医者男性の看護師のような人が手術室の入り口らへんにいて、助手みたいなものをしている。そんな長く務めているわけではないが、簡単な助手の仕事に任された。初めて見る手術に少し耐えきれなくなってきている。早く手術室から出たいと思う。手術は成功し、やっと手術室から出られる。ほっとしたのと同時にもう入りたく見たくないと思う。また普段の仕事に戻る。

(例7) 姉。緊急の手術が慌ただしく行われている。急に倒れてしまったから。一緒に居る時に姉が倒れた。手術の成功を心の底から願っている。早く元気になればいいと望んでいる。危機を乗り越えて無事に手術が成功した。

「看護師」

(例8) 看護師の女性が医者が行っている大きな手術の手伝いをしている。

この病院の院長の息子が肺癌にかかり、緊急手術をしなければいけなくなったため、若い看護師が手伝うことになった。

責任の重いものであるという重圧を感じている。医者の手術が進みやすいように手伝いが出来る事を望んでいる。

手術が無事終了。一命は取り留めたが、油断できない状況に患者は陥っている。

「終わる」

(例9) この人の恋人が生死をさまよう病気や事故にあり、一進一退の手術を行っている。病気や事故は自分ではどうにもできない運命だ。無事に終わって。難しい手術だったけどで、何時間もかかってしまったけど、なんとか手術は成功した。

「立つ」

(例10) 街大きな建物の前で若い男性が立ちつくしている。何か祈るような表情でただ立っている。出勤してすぐに妹が倒れた。〇〇病院に運ばれたと連絡があった。どうか助けて下さい、と必死に神頼み。業務をこなしながらずっと妹の身を案じている。休業時間と共に病院へ走り出す。妹は無事手術を終えていた。

(例11) 医者2人と看護婦の人が手術を行っている。若い人は立っているが、自分が手術されている様子を見ている。医師と看護師は立っている人には気付かない。手術されている人の意識がない(交通事故で手術中)、自分は幽体離脱してしまって、自分が手術されているのを見ているんだと思っている。体に戻れば生き帰れると思入ろうとする。自分とは別の幽体離脱した自分が先に自分の体に入ろうとしている。(手術の成功・失敗が不明な例)

「自分」

(例9参照)

(例11参照)

(例12) 若い男の人がいて、今その人の奥さんが帝王切開で赤ちゃんを産もうとしている。予定日を五日過ぎてもまだ生まれず、やっと陣痛が来たが、中々生まれそうもなく、お母さんの体力も心配な為、帝王切開になった。早く生まれて欲しい。でも赤ちゃんも奥さんも無事でいて欲しい。何もできない自分がもどかしい。やっと手術室から赤ちゃんの泣き声が聞こえ、ほっとした。と同時に嬉しさがこみ上げて来て涙が出た。赤ちゃんも奥さんも無事だった。